



うにも違和感が拭えない、と電話口で話すその人をAさんとしておく。ホテル経営をしている知人がこんな話を聞かせた。

ある女性宿泊客が誤って指輪をトイレに流してしまつた。それを聞いたホテルは、従業員たちで汚水槽に入り、手探りで八時間かけてようやくのこと見つけ出したのだ、と。

Aさんの話には、その序章に当たるものは特になかつたので、ぼくは聞きながら、ホテルが客のためにそこまでするといふサービス精神がテーマなのだろうかと思つていたら、Aさんが続けて言つたのは、冒頭の言葉だつた。

指輪が女性にとつてどれほど値打ちのあるものか、またホテルがどう考えてそのような行動に及んだのかはわからない。でも、いかな理由があつたにせよ、従業員に長時間汚水槽を探させたというのが納得がいかない。それは、巷間言われるところのカスハラと地続き、あるいは助長させることではないか。

聞きながら、浮かんできたもう一つの話。その話者をBさんとしておく。禅僧であるBさんが関西で修行中、阪神淡路大震災が起きた。寺を挙げて避難所のボランティアにあつたついで、被災者にとつて最も困難な問題の一つがトイレであることを知る。処理し

きれない汚物が被災者の心をどれだけ押し潰していたか、私も近似する経験があるので想像がつく。Bさんは、同行の僧侶たちとその始末を買つて出た。「はじめこそ勇気が要りましたが、やり出すとできるものです」

Bさんはそう言つて笑つたが、それなりの装備はしたにしても、山なす汚物をひたすら手作業で取り除くには、相当な胆力を要したことだろう。

ホテルの従業員も僧侶も一人一人の心の中に下りてみねば本当のところはわからないだろうし、それが一つとも思えない。指輪を落とした女性や被災者の思いもまた単色で表せるものではないだろう。ただ、少なくともBさんはその行為を被災者に言われてではなく、自分の考えで始めた。感謝の言葉をもらい、宗門の評価も高めただろうが、それは結果に過ぎない。

汚水槽の清掃が身分で定められているある国のルポを読んだことがある。衛生管理も不十分なまま強いられ、多くは健康を害していく。最下層の役割と固定され、歴史や文化で包囲されると、そこから脱するのは極めて困難だ。

汚物が映し出す人の諸相は、だれもが厭うものだからこそ装飾が剥ぎ取られて、素つ気ないまでに剥き出しになるものらしい。

老い老いに  
木幡智恵美

15



焼け通信三年目の一九九五年が暮れ、一九九六年が始まつてすぐに、村山富市内閣から橋本龍太郎内閣に移つている。その二月、将棋の羽生善治さんが七冠を達成。将棋をかじり始めた二男が「大きくなつたら羽生になる」とよく言つていたつげ。前の年にウインドウズ95が出てからウェブサイトが急速に増え、一九九六年三月から一年で九倍近くにまでなつている。

ポータルサイトYahoo! JAPANの登場もこの年からだ。今なお子どもたちに大人気のポケモンもこの年から。そして、女の子たちの間ではミニスカート、ルーズソックスが流行り、アムラーが溢れた。中学生になつていた我が娘も、何がいいのかだばだばのソックスを履き、カラオケに行くと沖繩出身の安室奈美恵の歌を熱唱していた。その沖繩では、やはりこの年も悲劇が起きている。六月、名古屋市の子中学生が二人拉致殺害されたのだ。続いて各地で腸管出血性大腸菌O157による集団食中毒事件が発生。死者や後遺症患者を出したこの耳慣れない菌は、世の中を震撼させた。悪いことばかりではない。この夏に開かれたアトラントオリンピックでは有森裕子さんが女子マラソンで銅メダルを獲得している。

そんな中、四月二十七日に隠岐を訪問し、講演会でお話された伊藤ルイさんが、二ヶ月後の六月二十八日に満七十四歳で亡くなられた。夕焼け通信には、隠岐文化会館で行われたルイさんの講演録が掲載され、その後、編集長とYさんは、福岡で行われた「みんなでルイさんを送る会」にも参加。ルイさんの追悼文も寄せられ、夕焼け通信に掲載された。

そのルイさんが、病床で語られた口述筆記が、劇団「たいよう」のYさんに届いたのは六月半ばのこと。「『かつぱの笛』舞台稽古最高でした。演出者と演技者の呼吸の行き交いがとても豊かな雰囲気、これこそが最高の芸術劇場、ステージだと思いました。有り難うございました。」

ルイさんに絶賛された劇団「たいよう」による『かつぱの笛』、この年の九月に本土松江の八雲しいの実シアターで公演することになる。

30代フリーター 谷川俊太郎が亡く  
なった。

年金生活者 吉本隆明の『言語にとつて美とはなにか』の核心を鮮やかに絵解きする言葉を谷川が残していることを、朝日新聞編集委員の吉田純子の追悼記事で知った(11月19日夕刊)。谷川はこう語っている。

「音楽は、無意味だからこそ素晴らしい。意味を引きずる言葉を、どう無意味に近づけるか。それが詩の問題なのだ。僕は思っている」「言葉は、どうやつても音楽にはかなわない。僕はきつと死ぬまで音楽に嫉妬し、片思いし続けるのだと思う」

「意味を引きずる言葉を、どう無意味に近づけるか」という問いを、吉本の言語理論に翻訳すると、「指示表出を引きずる言葉を、どう自己表出のかたまりに近づけるか」ということになる。指示表出とは対象を指し示す働きであり、自己表出は言葉を発する者と受け取る者の心の位置と向きを決める作用を指す。写真にたとえれば、前者

30代 吉本は『言語にとつて美とはなにか』で自己表出を「対象にたいする意識の自動的水準の表出」と説明した。それから40年余りのち、次のように言い直した。

《自分と、それから理想を願望するもうひとりの自分とのあいだがどれだけ豊富であるかということ、これが自己表出の元であり芸術的価値の元である。厳密にはそういうふうに言い直さなければいけないというのがぼくの考え方です。》(『日本語のゆくえ』) 年金 「理想を願望するもうひとりの自分」とは、私の理解では「母胎の樂園への帰還を願望する自分」ということになる。これに対して、それがかなえられない願望であることを知っている現実の「自分」がいる。吉本はこのふたつの「自分」の間の豊富さが自己表出の元だと言っている。

「理想」すなわち「楽園」に到達することは現実には不可能だ。だから、それを願望する「自分」はその代替物を求めるほかない。それは本物ではな

は被写体を写し取る動作に相当し、後者は撮影者の位置と向きを表すアングルにあたる。被写体には意味があるが、アングルに意味はない。

30代 吉田は記事の中で、谷川の詩に武満徹が曲を付けた反戦歌「死んだ男の残したものは」を次のように分析している。

《詩は、六つの連からなる。最初から四つ目までの連はそれぞれ、かようなフレーズで閉じられる。

「墓石ひとつ残さなかった」「着もの一枚残さなかった」「思い出ひとつ残さなかった」「平和ひとつ残さなかった」

「残さなかった」から「残せなかった」へ。個の意思を奪い、すべてを虚無とする。これが戦争の本質なのだ、「さ」と「せ」のたつた一文字の違いで語り尽くしてみせた。》(同夕刊)

年金 私はそこを読んだとき、ゴシックで書かれた四つのフレーズをひと続きの文章のように錯覚し、最後の「平和ひとつ残せなかった」への「転調」に泣きそうになった。「『さ』と『せ』

いので、得られても必ず不全感が残る。言い換えれば、現実の「自分」は元のままであることを認めざるを得ない。その不全感がさらに代替物を求めさせ、それが繰り返される。

その繰り返しと言葉において行われるときにおのずと描かれていく軌跡と

のたつた一文字の違い」を支点にした「転換」が不意打ちのように鮮やかだったからだ。

「転換」は「韻律」「撰択」「喩」とともに「言語にとつての美」を生み出す自己表出の作用と吉本は考えた。《われわれの言語美学的考え方からすると、まずはじめに〈韻律〉が根底にあり、それから場面をどう選んだかという〈撰択〉があり、表現対象や時間が移る〈転換〉ということがあります。そしてメタファー(暗喩)やシミリ(直喩)などの〈喩〉があるわけです。この四つは言葉の表現に美的な価値を与える根本要素になるわけです。》(『詩人・評論家・作家のための言語論』)

「残さなかった」の反復が「韻律」を生み、「墓石」や「着もの」や「思い出」や「平和」が「撰択」され、それらが「残さなかった」「残せなかった」ものとして戦争の「虚無」の「喩」をなし、そして「さ」から「せ」への転換が全体の構成の要をなしている。

して自己表出が生まれる。理想を願望する「自分」と現実の「自分」との間に蓄積されていくその繰り返し豊富さが自己表出の元になる。そう吉本は言っているように聞こえる。その豊富さは差異をとまう反復からなる時間的な豊富さということが出来る。

「松島やああ松島や松島や」という句を現実の「自分」と「理想を願望する自分」との間で繰り返し返される問答として読むと、最初の「松島や」の背後に松島の絶景に没入したい「自分」、楽園の代替物としての松島に包み込まれたい「自分」、そういう「理想を願望する自分」を感じ取ることが出来る。しかし、そうなれない現実の「自分」が他方にあり、それが「ああ」という嘆息となつて、いつそう切実に松島を求める「松島や松島や」へと続く。

吉田は別の追悼記事で「谷川さんは詩という子宮の中で、胎児のごとく、時に無意識に、言葉の宇宙と戯れることができた」と書いた(11月19日朝日新聞デジタル)。

ニュース日記 949  
中村 礼治

## 谷川俊太郎と吉本隆明